



JUDGEMENT scene-1

鳴海はるか

「はあっ、はあっ、はあっ・・・。」

乱れた呼吸音に混じって数多の靴音が薄暗い路地裏に響く。

繁華街の暗い路地を、数人の人間が走っていた。

いや、正確には一人の人間を複数の人間が追い回していると形容した方がより相応しいだろう。

追われている側の人間は高校生くらいの女の子で、周りに助けを呼びかけながら必死で逃げ回っていた。

「お願い！誰か助けて！誰でもいいから！」

その後を追う複数の人間は、女の子よりも少しは年が上だろうか。そこらにたむろしているような、いろいろな意味でちょっと悪そうな男たちだった。

「だからよお、姉ちゃん！俺たちが助けてやるって言ってんだろおー？」

「優しくしてやっからよお、俺たちと遊ぼうぜ！」

追われている方の女の子は、必死に道すがら見つけた扉を叩いて周る。しかしおそらくこの騒動を聞こえてはいるが関わりたくないのか、無情にもどの扉も固く閉じられたままだった。

「何で誰も助けてくれないの!？」

その言葉を言い終わるか終わらないかのタイミングで、彼女の手はつかまれていた。

—それはもちろん後ろから追ってきていた男の手によって。

「ヒッ!？」

彼女は短く悲鳴を上げ、その手を振りほどこうとした。

——その瞬間。自分とその周囲にもたらされた異変に気づいた。

自分を含めた周りのものが動かなくなっていた。

混乱しながらも彼女は自分の息ができることに少しだけ安堵していた。

そんな時、頭上から光をまとって何かがふわりと舞い降りてきた。

——天使。まさに彼女の中でのイメージどおりの天使の姿がそこにあった。

「君ハ僕ニ助ケテホシイ？」

「えっ？」

あまりにも有り得ないことの連続に、彼女の脳はすぐに現在の状況を判断できなかった。

「君ハ僕ニ助ケテホシイ？」

彼女が口を開こうとしたのとそれは同時だった。

天使の頭を銃弾が貫いていた。

弾丸が着弾した部分を中心として天使の顔面が陥没する。

そして間をおかずに黒い影が飛来すると、巨大な手で天使をつかんで握り潰した。

ぐちゃり、と巨大な手の中から嫌な音が響き、血が滴る。

だがそれもつかの間、巨大な手からものすごい勢いで青い炎が上がった。

そして次の瞬間には、天使だったものは灰となっていた。

「ベルフェサー、天使を殺っちゃうのはいいんだけどさー、もう少し泳がしてコイツの親玉の居

所を割り出した方が良かったんじゃないの？」

後ろから急に声が聞こえて彼女は驚く。誰かもう一人いるのだろうか？

目の前の黒い影は彼女のことは眼中にないかのように、その声に応えるためにを振り返った。

彼女はそれがひょっとしたら何か化け物ではないかと想像していたのだが、以外にも普通の人間の男性みたいで少し拍子抜けしてしまった。

それに巨大な手だと思っていたのが普通の人間とまったく変わりなかった。

下手をするとどこぞで執事でもやっていそうな印象すらある。何事もなかったかのように手袋をはめる最中だった。

「それではこのどうしようもない下衆な男たちを殺すことになるでしょう。ひいてはこちらの淑女も。」

そこでベルフェと呼ばれた男は彼女が自分を見ているのに気がついた。

「おやおや、お嬢さん。もしかすると貴女には私たちのことが分かるのでしょうか？」

彼女はどうか思案していた。ひょっとしてここで見えているといたら殺されてしまうのじゃないか？

「大丈夫です。私たちは人間を殺したりはいたしません。フルーレ、とても驚いたことに彼女には私たちの姿が見えるようですよ。」

そしてベルフェが彼女の肩を叩くと、金縛りのようになっていた体が急に自由になった。

そこへ彼女の後ろにいた声の主も姿を現した。その彼は彼女と同じかそれより若いように見えた。

赤と青のオッドアイがとても目を引くが、それ以外はやはり普通の少年といった感じだ。

「へ～。確かに僕たちのことが見えているみたいだね。不思議だねえ。」

彼女の周りを値踏みをするようにぐるぐる回っていた彼に、ベルフェが苦言を呈す。

「フルーレ、そのくらいにしましょうか。淑女が困っていらっしやいますよ。それに早急にこの場に張られた結界も解いておかないといけません。」

「しょうがないな～。とりあえずこの野郎共の目の届かない位置まで退避するぜ？」

ベルフェとフルーレはアイコンタクトを取ると空中へ飛び上がった。ベルフェにいたっては彼女を小脇に抱えてだったが、まるでそれを思わせないかのように軽やかな動きだった。

その時彼女の視界には、二人の背中から黒い翼が生えているのが見えていた。

そして元いた場所が視界から消えるか消えないかでフルーレがパチン、と指を鳴らした。

しばらくすると下の方から怒声やら何やらが聞こえてくる。

ここに至ってようやく彼女は口を開いた。

「あの、私は家に帰りたんですけど・・・。」

彼女の言葉にベルフェが爽やかな笑顔で返す。

「申し訳ありません、お嬢様。必ずご自宅の方へお送りいたしますので、しばし私たちとお付き合い願えませんか？あと、もし良ければ御名をお聞かせ願えれば幸いです。」

「はい、分かりました。こちらとしてもお聞きしたいことがありますし。そして名前ですが、松田菜奈です。」

「ご協力ありがとうございます。ちなみに私どもの名前ですが、私がベルフェゴール、通称ベルフェ。そちらの小さい方がフルーレティ、通称フルーレです。」

「小さい方とかいうな！泣かすぞ！」

フルーレが喚くのも気にせずベルフェが続ける。

「私たち二人は『神を狩るもの』の一員です。」

こうして3人の姿は闇の中へと溶け込んでいったー。

ずいぶん豪華で大きなソファに菜奈は一人で腰掛けていた。

ここは郊外にあるとても大きな洋館。その応接室に彼女は通されていた。

その洋館自体は知ってはいたが、人気がないことから幽霊が出るとか巷では有名なスポットだった。

「どうぞ。イングリッシュ・ミルクティーです。お口に合えばいいのですが。」

ベルフェが菜奈に紅茶を出して一礼する。そしてそのまま後ろを振り返ると、そこには菜奈と対面にあるソファに足を投げ出して寝そべるフルーレがいた。

「フルーレ。あなたはもっと行儀良くしないと駄目です。まして今日は淑女もいらっしゃるというのですよ？」

「うるせーんだよ。自分ちで何やってようがかまわないだろ？」

そうフルーレが返した瞬間、フルーレと菜奈は部屋の温度が急に下がるような感覚にとらわれた。

「フルーレ。もう一度貴方に言いますよ。行儀良くしてもらえますね？」

ベルフェの顔には爽やかな笑顔が浮かんでいたが、纏うオーラは確実にそれとは逆のものだった。

「するする！今すぐ！！」

フルーレは思わずソファから転げ落ちそうになりながら座りなおす。

「申し訳ありません、菜奈さん。ついお見苦しいところをお見せしてしまいました。どうかゆっくりくつろいでください。」

ベルフェがカップの紅茶を啜るのを見て菜奈も紅茶を一口、口に含んだ。

「！おいしい！」

「気に入っていただけましたか？これは茶葉の選定から淹れ方まで私がこだわった物なのです。お気に召したのならば幸いです。」

しばらく和やかな雰囲気の中でティータイムの時間が流れていった。フルーレは相変わらずそっぽを向いていたが。

「さて、そろそろお話をしましょうか。」

「あの、私昨日起こった出来事がまったく理解できていないんですけど・・・。」

「それは仕方ありません。人間界での摂理ではありえない事が起きていたのですから。」

ベルフェはさもさりげなく、といった感じでうなづく。

「まず貴女が暴漢共に追われて路地裏を逃げ回っていたのは理解できますね？」

菜奈は無言でうなづく。

「そして暴漢に捕まりそうになったところで動けなくなった、正確には周りの時間が止まったのはわかりましたか？」

「・・・そう。あの時急に時間が止まったようになって顔しか動かせなくなって。それで天使みたいなのが上から現れて・・・。」

「えっ？菜奈さん、もう一度お伺いしますが顔が動かせたということは周りの物が見えていたのですか？天使の姿も？」

「え？はい、全部見えていたけれど・・・天使の姿も。」

菜奈の言葉にベルフェは顎に手を当てて何か考え込んでいた。まったく興味なさそうだったフルーレも菜奈を凝視していた。

「・・・それでは私たちのことも、感じていたのではなくて見えていたということですか？」

菜奈は首を傾げながらもうなずく。

「菜奈さん、今あなたの目に私は映っていますか？フルーレしか見えませんか？」

ベルフェは立ち上がると菜奈の前で方膝をついて菜奈に片手を差し出すようにした。

「さあ、お手をおとりください。」

菜奈はベルフェとフルーレを交互に見ながら、訝しげに差し出された手を取る。

「素晴らしいです。実は今の私は普通ならば人間に見えないはずだったのですよ。そして後半に言った私の言葉、あれも同様に普通の人間には聞こえないはずの言葉だったのです。」

「やれやれ、せっかく普通の人間にでもわかるように気張ってやってたのに無駄足だったのかよ。まあでもこれで話は早いんじゃないの？」

フルーレが肩の荷が下りたといわんばかりにため息をつく。

「そうですね。それでは続きに入らせていただきますね。菜奈さんの見た天使、あれは実際に私たちも向こう側も天使と呼んでいます。あれが結界を張ったので周りの空間だけ、時の流れが一時的に止まったのです。その際に天使から何か、契約のようなものを持ち出されませんでしたか？」

「契約・・・ですか？」

契約と聞いて菜奈はすぐには思い出せなかったが、ふと天使に言われたフレーズを思い出していた。

「契約、と言うほど大袈裟なものじゃなかったですけど、『君は僕に助けてほしい？』って聞かれました。」

「それは間違いなく契約ですね。そうやって天使は人間と契約するのです。」

「もし契約するとどうなってしまうんですか？」

「菜奈さんの例ですと、契約完了するとあの暴漢たちが人間界から消滅、その後は天使の手先となって人間界を自分たちの言いように創り変えようとするか、もしくは菜奈さんも天使にされてしまっていたか・・・。」

「まあぶっちゃけ天使が出てきた時点でどう転んでもアウトだったってことさ。人間に分かりやすいように言うなら、悪が作った悪の手先だからな。天使どもは。」

ベルフェの説明が待ちきれなかったらしく、フルーレが簡潔にまとめて説明した。その説明に菜奈は不思議そうな顔をして尋ねる。

「天使は悪なの？私のイメージだと天使って神様の使いで聖なるものって感じがするんだけど？」

「人間の神や天使のイメージといたらそういったものでしょう。ただ、それがもし神による情報操作だとしたら？つまりは、そういうことです。」

広間に静寂が訪れる。その静寂を破ったのは菜奈だった。

「ベルフェたちから今聞いてきたことはまだ信じきれないところがあるけど、とりあえず今はいいわ。ところで、貴方たちはどういった存在なの？最初からの話からすると人間ではないみたいだけど・・・。」

「ふむ、そうでした。これは失礼をいたしました。」

そこでベルフェは紅茶を一口飲んでから菜奈に告げた。

「私たちは、人間界で言うところの悪魔です。」

「おはよう、菜奈。」

「あ、おはよう。」

登校中に級友から声を掛けられそれに答える。いつもの光景だ。だが、菜奈の心は別のところにあった。

その原因はもちろん、昨日ベルフェたちとの会話によるものだった。

彼らは自分たちのことを悪魔だと名乗った。

悪魔と聞いたら、普通の人はずいぶん間違いなく良い印象を抱くことがないだろう。

だが彼らは悪魔はそのような存在ではないと言った。基本的には人間に対しては無干渉な存在らしい。

そして逆に人間に対して干渉している、噛み砕いて言えば悪事を働くのが神であると。

残念ながら菜奈にはそれを無条件で受け入れられるほど、柔軟な考え方をもちあわせてはいなかった。

授業が始まってからも菜奈にはそれどころではなかった。日常を忘れてしまうような衝撃を味わってしまったのだから。

「結局のところ、あれは夢か幻でも見たのかな……。」

菜奈が独りごちる。そして何気なく机に肩肘を着き外を眺めた瞬間だった。

「！」

周りの時間が止まったのが分かった。この前経験したときとまったく同じ。

やはり顔は何とか動かせるが、それ以外は何かで固められているかのように動かなかった。

「う……ごけっ！」

菜奈の体を拘束していたものが砕け散ったかのような感触とともに、その身が自由になったことを実感する。

そこで、自分の視界の中に見覚えのあるものが見えていることに気がついた。

—天使。

「アレ？何デ動ケルノ？」

天使がゆっくりと菜奈の元へと近づこうとする。

菜奈はクラスメイトに被害が出ないように、廊下へ出ると走り出した。

菜奈の動きに合わせて天使が追いかけてくる。だがその動きは遅く、このままなら何とか撒けそうだった。

階段を思い切りジャンプして下り、1回へと着く。そこからある程度遮蔽物のある中庭へと誘導しようと考えていた。

そこからどうするかまでは考えてはいなかったけど、最悪この前の洋館の近くまで行けばあの二人が気付いて助けてくれるだろう。それくらいに思っていた。

もうあと少しで中庭への扉に着く、というところで菜奈は自分の真横に危険な存在を感じた。

はっとして咄嗟にそれに向かって防御の体制をとった。

ガッ！ガシャーーン！

菜奈の体は廊下のガラスを突き破って、意図せずも予定地点であった中庭へと到着することとな

った。

「う・・・痛っ。」

幸いにもガラスが刺さったりはしていなかったが、打撃を防いだ両手にはくっきりと痣が残っていた。

そして、破られた窓から天使が顔を出す。

「アレ？マダ死ンデナイノ？」

「あれくらいで死ぬわけないでしょ！この私をなめないでよね！」

そうは言っても菜奈には天使に対する手立てが用意されていなかった。この分だと洋館までは辿り着けないかもしれない。

菜奈は運動神経には結構自信があったが、さっきの天使の動きから考えるに常識は通用しそうにない。

おそらく全力疾走したところで先ほどのように追いつかれてしまうのがオチだろう。

かといって立ち向かうにも素手では心許ないし、得物があるわけでもない。

そんなことを考えていた彼女の視界の隅に、黒い影がこちらに飛来してくるのが見えた。

ひょっとして二人が来てくれたのかと思ったが、それは二人よりもずっと小さな生き物だった。

。

一羽の鴉。

だが、そこから聞き覚えのある声が届く。

「申し訳ありません、菜奈さん。その鴉に適当に手を突っ込むと貴女の欲しい武器が出てきますから、それを手に今しばらくその場を凌いでください。私たちもそちらへ向かっていますので、ご自分の身を守ることをだけをお考えになって行動してください。」

鴉は菜奈のそばに来るとじっとしている。恐る恐る触れると、その手は鴉の中へ何の抵抗もなく入っていく。

ここまで来たら、覚悟を決めるしかない！

菜奈はその手に触れたものを力いっぱい握り、引き抜いた。

その手に握られていたのは、漆黒の闇を思わせるかのような日本刀であった。

それを見て天使が反応する。

「ソレハ悪魔ノ武器。悪魔ハ排除スル。」

天使がスーッと菜奈に近づいてくる。菜奈は左手に鞘を持ち、右手でその柄を握る。

天子が菜奈に掴み掛かる寸前で、横に身をかわしつつ刀を抜き払っていた。

天使は菜奈の横をすり抜けてしばらくのところで、頭と胴を両断されて地に崩れ落ちていた。

「ふっ・・・。」

菜奈はその瞬間、緊張の糸が切れてその場にへたり込んだ。

「意外と何てことないじゃない。これなら二人の到着を待たなくても・・・」

そこまで言ったところで、横から天使がもう一体菜奈に向けて迫っていることに気付いた。

ひょっとして最初から二体いたからあの不意打ちを食らったんじゃない？

慌てて菜奈は立ち上がり再び刀を構えようとした。が、先ほど受けた手の痛み思わず刀を落

としてしまう。

「しまっ・・・。」

天使はもう菜奈の眼前まで迫っていた。死ぬかもしれない。

不意に数発の銃声が鳴り響く。

目の前にいた天使は銃弾の直撃を受け吹き飛ばされていた。

銃声のしたほうを菜奈が見ると、そこには西部劇のガンマンよろしく銃口に息を吹きかけるフルーレがいた。そしてクルクルと銃をまわすとホルスターにしまう。

そしてベルフェが菜奈の元へと飛んでくるとその手をとった。

「すみません、菜奈さん。お怪我をされたのですか？」

ベルフェは菜奈の腕の痣を見るとそこへ自らの手を当てる。

ほんのりと温かい感じがして、菜奈の傷は癒えていた。

「どこか他にお怪我はされていませんか？何かあれば何なりと申し付けください。」

「大丈夫。窓を突き破って吹き飛ばされたけど、ガラスで怪我もしてないし、あとは受身も取ってるからなんともないみたい。」

「まったく、お前が結界を切り崩したりしなかったら何事もなく俺たちが片付けてたんだぜ？人間ごときが手を出そうとするからこんなことになるんだよ。」

「フルーレ、口が過ぎますよ。それにしても菜奈さん、結界を切り崩したことといい天使を切り倒したことといい、はっきりとは言えませんが貴女は私たちと近い血を引いていらっしゃるかもしれませんね。」

「そう・・・なのかな？特に今までそんなこと聞いたことがなかったけど・・・。」

「まず結界を解くという行為そのものが人間には不可能なことですからね。いわゆる僧侶だとか修験者であってもそれは変わりません。」

そこで一度ベルフェは口を閉じ菜奈が切り捨てた天使の亡骸の元へ歩いて行きそれを観察する。

「そしてこの天使についてもそうです。普通の人間には悪魔の武器を自在に操るだけの能力は持ち合わせていません。よくできてもかすり傷のような傷をつけるのがせいぜいでしょう。」

「それが見事に一刀の下に両断されている。それが菜奈が普通の人間ではないって事を表してるってことさ。」

フルーレがちゃっかり話しに割り込んでくる。

「それにしてもお前のその刀、血糊ひとつ付いてねーじゃん。まったくとんだダークホースの登場だぜ。」

フルーレが口笛を吹く真似をしながら肩をすくめる。

菜奈にはまだまだ分からないことだらけだったが、三人の戦いはこうして始まった。

読んでくださった皆様、ありがとうございます。

本作はショートストーリーで月に一度の連載型式で続けていこうと思っています。
現在病気療養のためのリハビリを兼ねての執筆ですので誤字脱字等あるかと思えます。

そういったことや、その他なんでもいいのでご指摘くださるととても嬉しいです。

それでは、次回作でまたお会いできることを祈ってー。

2013年4月1日

JUDGEMENT scene-1

<http://p.booklog.jp/book/67470>

著者：鳴海はるか

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/fd3sharuka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/67470>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/67470>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ